

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。 Copyrighted materials of the authors.

## 「アフリカ史叙述の方法にかんする研究」(2011年度第3回研究会)

日時：2011年11月12日(土) 14:00-18:30

場所：AA 研小会議室(302)

報告者1：鈴木英明(AA 研共同研究員、東洋文庫)

報告タイトル：「新しい世界史叙述のなかのアフリカ?—『アフリカ』の再分割を目指す」

報告者2：眞城百華(AA 研共同研究員、津田塾大学)

報告タイトル：「国境/民族に関する歴史叙述の方法—エチオピア・エリトリア史の視点から」

### 1. 鈴木英明「新しい世界史叙述のなかのアフリカ?—『アフリカ』の再分割を目指す」

本報告では、まず、歴史研究の今日的意義を検討した。世界がより一層の一体化を見せる現状に際して、各国史(地域史)の足し算としての世界史の在り方をまず批判した。「アフリカ史」という枠組みもこうした足し算としての世界史の一部として機能している。次に「アフリカ史」の場合、その内部の多様性が強調される一方で、その一体性が説得的に語られることがきわめて少ない点を幾つかの日本語で刊行されているアフリカ史の文献に則って指摘した。これには様々な理由が考えられるが、ひとつに「アフリカ史」として包摂される各地域が全体として一連の連動性や、一体としての共通性をその歴史のなかにあまり持続的に持ってこなかったことに理由が求められるだろう。これらを踏まえると、今日的な有効性を持ち、また、歴史的な実態を伴った世界史理解のあり方を模索するうえでは、「アフリカ史」という枠組みを一度、解体し、別の枠組みでこの「アフリカ史」が対象とする人々の過去を考える必要に気付く。本報告では、そうした別の枠組みのひとつの可能性として、インド洋西海域世界を事例に考察を行った。

報告後には、幾つかの質問やコメントが寄せられた。ここでは個々の議論の詳細は省くが、報告者の意図には、「アフリカ史」を叙述することへの完全な否定が含まれていないことは、指摘しておく。言い換えれば、どのような歴史像を描くのかは、究極的には個人の自由なのであり、描かれ(う)る歴史像は、それを試みる人の数だけあって良いということである。また、おそらくは、あらゆる側面を取り込んだ歴史叙述は不可能なのであり、多様な歴史叙述がそれぞれの叙述の覆いきれない部分を覆い、あるいは、重なり合いながら存在することで、我々の過去への理解が深まっていくのだろうと報告者は考える。その点では、「アフリカ史」という枠組みもそうした多様な歴史叙述のなかのひとつとしてあるべきであろう。

## 2. 眞城百華「国境/民族に関する歴史叙述の方法—エチオピア・エリトリア史の視点から」

本研究会において、「国境/民族に関する歴史叙述の方法-エチオピア・エリトリア史の視点から」と題して報告を行った。植民地分割によりアフリカ大陸の多くの民族が民族の分断を経験した。列強により決定された国境線、それによる民族の分断が現在も多くの問題を引き起こしている。アフリカの独立国と謳われたエチオピアもその例外ではない。エチオピアを取り巻く周辺地域が植民地支配される中、ソマリ、アフール、ティグライなど国境周辺に居住する民族は分断を経験している。本報告では、現在のエチオピアとエリトリアに居住するティグライ人に注目した。ティグライ人は、エチオピアでは人口の約1割、エリトリアの人口の約5割を占める。1890年のイタリアによるエリトリア植民地支配によりティグライ人居住区が分断され、民族の分断は現在に至るまで両国間に大きなひずみを生んでいる。

エリトリアは1890年から現在までに、イタリアによる植民地支配、イギリス軍政、エチオピアとの連邦制、エチオピアへの強制併合、独立闘争の展開、独立、エチオピアとの国境紛争と目まぐるしい政治変容を経験してきた。両国関係を考察する際、両国を取り巻く国際関係の視点も不可欠となる。紅海をのぞむ地政学上の重要性からエリトリアはイタリア植民地処理問題、ならびに北東アフリカにおける冷戦の構図の中で翻弄された。イタリア、イギリスによる民族政策によってたびたび議論の俎上に上ったティグライ居住区の統合案は、エチオピアに脅威を与え、ティグライ州の統治や対エリトリア政策にも影響を及ぼした。

エチオピアとエリトリア関係において近年は対立の構図に関心が集まる。しかしながら、両国関係を詳細に分析すると多様な相が浮かび上がる。エチオピア政府は1940年代からエリトリア併合をにらんでティグライ人を利用した政治工作を繰り返してきた。分離と併合を繰り返す中で両国間を往来したティグライ人は双方の国に政治、社会、経済の分野で多くの影響を被り、また影響をもたらしてきた。近年、両国の史料公開が進み、研究の可能性も広がっている。対立の文脈を超えてティグライ人の動員、呼応、反発、抵抗、交渉など多様な相を各時代の分析で重視する必要がある。

(いずれも文責は報告者)